想像力のダイナミズムー寺田さんの世界ー

田中幸人

絵というのは、単なる平面の物質であるのに、無限の変幻と可能性を発揮する。思えば不思議なことだ。

絵が面白い、とか、絵が秀れているとかいうのは、単に「見て感じる」裸眼の快感のほかに、もう一つ「読みとって感じる」気持のふくらみがあるからだろう。「読みとって感じる」ふくらみが大きければ大きいだけ、絵は楽しくなるし、愉快さも倍加する。

永い間、 寺田健一郎さんの絵を見てきて、いつもこの人の絵に不思議な新鮮さを感じてきたのは、私一人だけではあるまい。新鮮に感じたのは、そのふくらみ、の伸びやかさというか、豊穣さではなかったろうか。

人は誰でも意識下に、言葉にはならない精神のダイナミズムを持っている。

絵画史にしろ、歴史にしろ、人々が遠い昔から受け継いできたのは、言語で現わされた歴史でも何でもなくて、民衆の一人一人が持っている、ごく生理的な、意識下のダイナミズムに共鳴し、それに根を継ぎ、伝統として受け継いできたのであって、知識でも論理でもなかろう。とくに絵画の場合はそれが強い。

意識下のダイナミズムを、西欧風にイマージュと呼んでもいいし、あるいは想像力といってもよい。

絵画の伝統とか、美術史の "本性“というのは案外そんな素朴なものではなかったろうか。

額縁に納まった絵を受け継いだのではなくて、イマージュの流れ、想像力の初源的なうごめきに根継ぎしてきたのである。「読みとる面白さ」は、だからこそある、というべきだ。

そんな眼で絵を感じていると、例えば寺田さんの絵は、くやしいほど見るものの生理を昂奮させる。いったい、この人が意識下にストックさせている映像は、どう生成し、展開しているのだろう。

絵が非常に生理的な様相を帯びているものだから、何か整然とは形にならないイマージュのダイナミズムが、見る側の直観に素朴に共鳴してくる。

時々この人の絵を見て「抽象画はわかりません」とつぶやいている人を見かけることがある。しかし私は、寺田さんの絵は抽象的要素をたくさん孕んではいるが、むしろ、すごく具体的な絵柄ではないかと確信している。

寺田さんの絵の中では、青や赤、紫やピンクの固まりが、遠慮会釈なくうごめき回っている。いや、出没する、といった方がいい。その出没の仕方がなんとも生理的で、ある時は風景を形づくっているようにも見え、ときには“種の萌芽”の植物的不思議さの拡大図のように感じることもある。

女たちの「厚み」のダイナミズムにも似たエロチックなエネルギーに重ね合せることも可能だ。そして、絵と共に自分自身が、何か遠くひろがり出す自然、たとえば一つの宇宙の生成過程の時空間の中で揺られていることに気付く。

恐らくこの作家は、無意識の風景、意識下のイマージュに、色と形と動きで息を吹きかけることによって、見えないものを蘇生させているのである。

寺田さんの絵の一つの大きな特徴は、色彩である。

マチスという人は、かげの部分を後退色 (黄色など)で現わし、近い部分を進出色(赤・青など)で置き換えたが、寺田さんの場合は、すべての色が等価に取扱われている。

色彩一つ一つが個有の働きを持ちながら、奇妙な象徴言語になっている。だからこそ「読みとる誘惑」も一段と魅かれる。

この人は、こっちがあきれるほど大胆な線で画面を区切り、もう一つ別のイマージュを画面の中に持ちこむのがしばしばだ。これは、いわゆる“絵の構図“が理由ではあるまい。別々の全く異質な心理場面を激突させ、何かを生成させようとしているに違いない。そんなとき、私は絵ののびやかさを感じて「うーん、広いなあ」なんて、思わずつぶやいたりしている。